（ 様式Ｄ－２ ）
（ 別　　紙 ）

令和４年度　海外派遣研究員研究報告書

令和５年５月９日

日本大学理事長　　殿
日本大学学長　　殿

所　　属　通信教育部（通信教育研究所）
資格・氏名　准教授・中澤瞳

令和４年度海外派遣研究員（　短期Ａ　）の研究実績を，下記のとおり報告いたします。

記

１　区　　分　　短期Ａ
２　研究課題

メルロ＝ポンティの現象学とフェミニスト理論に関する調査，研究

３　派遣期間　　西暦 2023 年１月９日　～2023 年３月 24 日
４　派　遣　先　　フランス・パリ
５　研究目的

本研究は、メルロ＝ポンティの現象学とフェミニスト理論に関する調査、研究を行うことである。より具体的に言えば、フェミニスト現象学の現在の状況を調査、研究することが目的である。

フェミニスト現象学は、メルロ＝ポンティの現象学とフェミニスト理論が建設的な関係にある研究アプローチのひとつである。フェミニスト現象学は、歴史的にはシモーヌ・ド・ボーヴォワールの『第二の性』が起点とされるが、このアプローチが制度化されたのはフェミニスト現象学の名のもとに研究が活発化した 1980 年代後半からである。フェミニスト現象学の動向がまとまった形で示された最初の文献としては、Fisher, L. and Embree, L. (eds.), 2000 *Feminist Phenomenology*, Kluwer Academic があり、その後 20 年の動向に関しては Fielding, H. A. and Olkowski, D. E. (eds.), 2017, *Feminist Phenomenology Futures*, Indiana University Press と、Shabot, S. C. and Landry, C. (eds.), 2018, *Rethinking Feminist Phenomenology: Theoretical and Applied Perspectives*, Rowman & Littlefield にまとめられているが、いずれも英語圏で出版された本である。そこで、これ以降、とりわけフランスにおいてどのような研究状況になっているのかを調査し、明らかにすることが本研究の目的である。

（ 様式Ｄ－２ ）

６　研 究 概 要

本研究は、フランスにおけるフェミニスト現象学の現在の状況を調査することが主たる目的である。経験を分析の対象の出発点として、そこから経験の一般的な特徴や、その経験を取り巻く社会通念、規範がどのように生きられているのか、またどのように乗り越えられているのかを明らかにしようとする点にフェミニスト現象学の独自性がある。当初はシスジェンダー女性の経験を当人の視点から記述し、考察することから始まったが、その後はそこに限定されない経験の考察にも検討の範囲は広がっている。

こうしたフェミニスト現象学の動向を調査、研究するにあたってフランス国立図書館のフランソワ・ミッテラン館（La Bibliothèque nationale de France、François-Mitterrand）での文献調査、およびその読解に作業を絞って、それを本研究の目的を遂行する基本的な方法とした。図書館内からアクセス可能なフランスの学術雑誌、例えば *Revue Philosophique de Louvain* や *Alter* などの現象学の専門雑誌、ボーヴォワールらによって創刊された *Nouvelles Questions Féministes*、また *Gender, Sexuality and Society*（セクシュアリティとジェンダーの問題に特化したフランス語の査読つきの学術雑誌）などの閲覧を通して、主にフェミニスト現象学の現在の展開、動向を明らかにするために調査、研究を行った。これに合わせて、メルロ＝ポンティの現象学についての文献研究の状況も確認した。これは今回の研究目的においては補足的な調査とはなるが、現在のメルロ＝ポンティ研究の一端を知るために行った。その結果、メルロ＝ポンティの現象学についての文献研究は現在も継続的に行われており、その成果が出版されているという状況であることが分かった。ここ 2、3 年の間で見ると、2020 年に *Le problème de la parole, cours au Collège de France (1954)*, direction d'ouvrage, transcription du cours et édition scientifique avec Lovisa Andén et Franck Robert, MetisPresses, 2020、また 2021 年に Emmanuel de Saint Aubert の著した *Être et chair II. L'épreuve perceptive de l'être : avancées ultimes de la phénoménologie de Merleau-Ponty*, Vrin, 2021 の出版などがある。また、2022 年 12 月には Michel Dalissier と Shôichi Matsuba の編集でメルロ＝ポンティが行った講義、講座、メモを注釈付きで書き起こした *Inédits (1946-1947)Volume I*、*Inédits (1945-1950) Volume II* が出版されていたこと、また Claire Dodeman がメルロ＝ポンティの哲学と政治の関係を扱った文献、*La philosophie militante de Merleau-Ponty* を 2023 年 1 月に出版し、直近ではこうした研究が発表されていたことが分かった。数は多くないものの、メルロ=ポンティの文献研究はフランスにおいて講義録の出版、研究書の出版を含めて継続的に行われていると言ってよいということが分かった。ただし、この文脈においてはフェミニズム的なアプローチの研究は見当たらなかった。

他方、フェミニスト現象学に関する調査、研究の結果としては、フェミニスト現象学の方法論に関する見直しが行われ、そしてそこから批判的現象学という動向が現れ、研究が展開されていることが分かった。この点についての詳細は研究結果・成果の欄に記す。

７　研究結果・成果

フェミニスト現象学の出発点とも言える著作は『第二の性』であるが、この著作がその後のフェミニズム、ジェンダー理論に与えた影響自体大きいものである。2022 年 9 月 28 日から 2023 年 1 月 23 日まで *PARISIENNES CITOYENNES! Engagements pour l'émancipation des femmes (1789-2000)*と題して、カルナヴァレ美術館（パリ歴史博物館）でフランスにおいて女性のエンパワメントの取り組みがフランス革命時から現在まで続いていることを示す大規模な展覧会が開催されていた。編年体で構成された展示内で、戦後のコーナーでは当然のことながらボーヴォワールが紹介され、『第二の性』の手稿とともに、その影響の大きさが解説されていた。

このボーヴォワールによって、メルロ＝ポンティの現象学的身体論は当初から評価されていた。それは社会の中で生きる具体的な人間のあり方を哲学的に探求するために必要なツールを提供するものとして有用だからである。しかしながら、それ以降フェミニスト達の目には、メルロ＝ポンティの現象学的身体論は健康な男性的身体を中心に据えた身体論であるとみなされて批判の対象となっていた。しかしながら、さらにその後メルロ＝ポンティの現象学的身体論を肯定的に評価する流れが再びできた。それがフェミニスト現象学という一つの流れを作り、中でもアイリス・マリオン・ヤングの有名な論考がその代表的文献のひとつとされている。現象学的身体論に性差という視点を導入し、男性中心的な身体論において取りこぼされてきた主題を扱ったヤングの諸論考は、個人の身体に、文字通り身体化された規範を明らかにし、そして規範性への身体的次元での反省を試みたといえる。

ヤングはフェミニスト現象学者としての仕事を残し、また政治哲学者としての仕事も多数残した（あるいは政治哲学者としての方が有名かもしれない）。日本でもヤングの文献は翻訳がなされているが、ヨーロッパではヤングの政治哲学の文献は、イタリア語、スペイン語、ドイツ語、スウェーデン語などに翻訳されつつも、フランス語ではまだアクセスできない状態である。したがってフランス語圏の哲学界におけるヤングの仕事の受容は限定的なものであった。この状況を踏まえて、2018 年に *Revue Philosophique de Louvain* という現象学研究の専門雑誌が「アイリス・マリオン・ヤング、社会・政治、そしてフェミスト哲学者と考える」と題し、その欠落を埋めるために特集を行った（*Revue Philosophique de Louvain*, “Penser avec Iris Marion Young, philosophe sociale, politique et féminite”, Tome 116 n4, 2018）。

この特集には、フェミニスト現象学者としてのヤングの研究について言及する二つ研究論文が掲載されている。Camille Froidevaux-Metterie の論考はフェミニスト現象学の独創性を評価する論考で、女性が自分自身を認識している身体的経験の詳細な探求をもとに、生きた身体の概念をジェンダーの概念と結びつけることで、女性の主体性を消すことなく、性差別的抑圧の構造的性格を認め、むしろその解放的可能性を回復させたと評している。なお、Froidevaux-Metterie によれば、フランスのフェミニストたちは唯物主義と差異主義に分裂したことによって、ヤングにこれまで関心を払ってこなかったという経緯があるようで、言語的な問題だけではないところでもヤングの受容に制限があったようである。

もう一つの論考は Marie Garrau の論考で、これはフェミニスト現象学の可能性の条件を方法論的に問うことで、これまでの分析を拡張するものである。大筋としては、ヤングの現象学への回帰を促しているが、Garrau の主旨は現象学的アプローチとヤングの距離に関わっている。フェミニスト現象学の古典にもなっているヤングの *On Female Body Experience: Throwing Like a Girl and Other Essays* には、身体化され、位置づけられた主体に現れるような世界の記述や、主観性という概念の使用などがみられ、そこに確かに現象学的方法がヤングに与えた影響を見て取ることができる。しかし Garrau によればヤング自身、慎重に現象学的方法から距離をとっている。実際、ヤングは現象学を「厳密な方法」としてではなく、むしろ問題を「検討するための一つの手段」として考えるべきだと実際に書き記しているからであり、この点を Garrau は指摘している。現象学的アプローチという方法論に対する Garrau の関心がより明確に示されているのは、Garrau が編者の一人を務め、2022 年に出版された *Expérinces vécues du gendre et de la race pour une phénoménologie critique*（sous la direction de Marie Garrau et Mickaëlle Provost, Editions de la Sorbonne, 2022）である。この序文の中で Garrau は、生きられた経験の記述を行い、分析する際の現象学の方法論の見直しを行っている。そこには、ボーヴォワール、バートキー、そしてヤングらのフェミニスト現象学（Garrau 自身はフェミニスト現象学という呼称を用いていないが）のこれまでの仕事に対して評価を与えつつ、それをさらに展開させるために、現象学的アプローチに対してこれまでなされてきた古典的な批判を乗り越える地点を模索している。そこに現われるのが批判的現象学という立場である。批判的現象学は哲学の方法であり、かつ政治的な活動の企ての方法であるとされるが、ただしこれは Garrau のオリジナルというよりは、Lisa Guenther と Gayle Salamon が提示しているものである。Guenther によれば、批判的現象学は私たちの世界経験を可能にし、また意味あるものにしている準超越論的な社会構造について反省することを通して、古典的な現象学を超えるのであり、また意味ある経験と存在のためにとっての新しくて解放的な可能性を生み出すことを目的としている。この見解がどのくらいの妥当性を持つものなのか、また批判的現象学とフェミニスト現象学とにはどのような隔たりがあると言えるのかということを明らかにする作業は終えることが派遣期間中ではできなかったが、もっと慎重に検討すべき点でもあるので、引き続き検討する計画である。

Garrau が指摘するような方法論的な問題だけではなく、フェミニスト現象学にはまだ考えなければならない問題も残されていることが分かった。たとえば、フェミニスト現象学が女性という存在を考えるためには、性差だけではなく、人種や、障害などの観点を追加的にではなく、初めから考える必要があるのではないかという問題がひとつあると思われる。こうした問題に対して、どのようなアプローチが可能かということについても今後研究を進める予定である。以上のように、今回の調査、研究の結果、フェミニスト現象学のこれまでの研究は一方で評価されているものの、その方法論に対しては捉え直しが行われており、その一つが批判的現象学というものに展開していることが分かった。ここから、この批判的現象学が扱っている問題を検討しつつ、今後の自分の研究と繋げたいと考える。